

第6回日本在宅看護学会 学術集会が開催される

第6回日本在宅看護学会学術集会が、
11月19日(土)・20日(日)に武蔵野大学
武蔵野キャンパス(東京都武蔵野市)に
おいて500名弱の参加者のもと開催さ
れた。学術集会長は、同大学看護学部教
授の酒井美絵子氏。今回のテーマは「地
域の平穩を看護の力で——在宅看護学
の体系化から」。

会員数増加、700人を超える

開会式では、同学会理事長の川村佐和
子氏が挨拶を行ない、毎年会員数が増え
ており、とくに昨年から1年間で約
1000人増え、全会員数が7000人を超
えたことを紹介した。順調な会員数の増
加に「この学会への期待が大きいことを
感じている」と述べた。

また、倫理委員会の発足に向けての動
きや、学会誌への投稿を促進すべく編集
委員会の動きを早めていることなどのほ
か、日本褥瘡学会と共同でランチョンセ
ミナーを開催することや、2016年4
月から日本救急看護学会と合同で委員会
を開き、今回の学術集会でも交流集会を
開催することを紹介した。

在宅看護管理が必要

会長講演「地域の平穩をつくる在宅看
護管理」では、酒井氏が自身の在宅看護
との関わりの始まりを紹介。阪神淡路大
震災後に在宅療養者から震災後間もない
ときにも、訪問看護師の訪問によって家
族が安心して家を離れる時間をつくるこ
とができた話を聞いて、訪問看護の重要
性を実感したという。

次に在宅医療に関する国の方針や高齢
者介護の状況に触れたうえで、在宅で生
活モデルに基づくケアを多職種と連携し
て行なっていくために訪問看護ステー
ションの管理者が担う管理実践について
解説した。

病院ではシステム化や役割分担されて
いる診療報酬請求業務や設備維持、物品
管理、人材採用・教育、安全管理などが、
訪問看護ステーションでは1人の管理者
や少ないスタッフで担われている現状が
ある。しかも、人件費率が80〜90%と高
く経営の安定を図るのが難しい。

こういった状況のなか訪問看護ステー
ションの管理業務を遂行していくために
は、氏は「とにかくがんばる」といった
気持ちだけでなく、しっかりとした組織

をつくり、組織のなかで役割分担をする
ことが重要であると主張。そのためには
管理者が訪問看護ステーションでの看護
管理や経営について学習して、先を見据
えた戦略を立てることが重要であり、そ
れには従来の病院における看護管理とは
別に「在宅看護の視点での看護管理が必
要」と述べた。

看護の視点からの ケアマネジメントが必要

会長講演後に行なわれた教育講演1
「データから読み解く少子高齢時代の在
宅看護のあり方」では、松田晋哉氏(産
業医科大学医学部公衆衛生学教室教授)
が登壇。松田氏は国内のデータをあげ、
今後慢性期の患者が増えると予測されて
おり、そうした患者がよかに地域でみて
いくかが課題になっていると説明した。
地域包括ケアの課題としては、より円
滑な多職種連携のためには、標準記録が
必要であることに言及。そのフォーマッ
トは学会が主導して作成することが望ま
しいとした。

さらに高齢者のケアマネジメントにお
いて患者が必要なケアを見極めるための
プロトコルの必要性や、看護の視点から
のケアマネジメントが重要であることを
指摘。現状では看護師資格をもつケアマ
ネジャーが少ないことを挙げ、今後、心
身および社会的なニーズをもつ高齢者に



会長講演で会場に語りかける酒井美絵子氏

総合的なサービスをコーディネートでき
る社会福祉的役割も担える訪問看護師が
必要と述べた。

次回は、2017年11月25日(土)・26
日(日)に佐藤悦子氏(山梨県立大学看護
学部教授)が学術集会会長を務め、山梨
県立大学池田キャンパス(山梨県甲府市
池田1-6-1)にて開催予定。